

大学入学以前の「生と死」の教育に関する検討

— 大学生の学びの経験から —

Considerations of “Life and Death” in School Education prior to Entering University — Through the Learning Experiences of Students

片 桐 史 恵
Fumie KATAGIRI

抄録：本研究では大学入学以前の学校教育における死生学の扱いを取り上げ、その実情を明らかにすることを目的とした。調査協力者は大学および短大生105名であった。その結果、小学校、中学校および高等学校のいずれにおいても50%以上の学生が「生と死」に関する授業経験なしと回答した。本研究で明らかになった死を考え始めた時期が13歳であることは、遅くとも小学校高学年から「生と死」に関する学びを始める必要があることを意味する。このことから「生と死」に関する学びに関して小学校と中学校の連携が強く望まれる。可能なら高等学校もこれに加えたい。次に、授業経験ありと回答した学生に対して調査した結果、小学校では道徳や総合的な学習、中学校では総合的な学習や道徳、高等学校では総合的な学習や保健体育の各科目が「生と死」の学びの中心的科目であった。しかし、今後の「生と死」の学びにおいては各科目が単独で学びの機会を設けるのみではなく、各授業科目相互の連携を考慮する必要があると考えた。

キーワード：「生と死」、大学入学以前の学校教育、授業科目

I. はじめに

人間は自らの人生を生きていく中で、様々な体験をする。希望に胸躍る喜びに満ちた体験もあれば、愛する人を亡くすという大きな喪失体験もある。この喪失体験は、死生観に如何なる影響を与えているのであろうか。大学生が自らの生を生き切るために生と死に向き合い、また、ケア従事者や医療従事者を目指す学生が人の尊厳を尊重するために生と死の学びを深めることは重要であると考ええる。

死生観に関する教育や研究について、糸島(2005)は死生観形成に関する調査から、園田ら(2007)はターミナルケア授業における学生の死生観に関する検討から、石田ら(2007)は看護学生の死生観に関する研究で、村上・佐藤・宮下・濱野・藤澤(2012)は社会福祉士養成の学部教育における学生の死生観に関する意識調査から、杉浦・黒田・海津・中嶋・岩瀬・中島・内野・鈴木(2013)は薬学生の死生観に関する意識調査から、その必要性について述べている。生と死に関する考え方や捉え方、そして価値観としての死生観の構築は大学生の専

攻の如何を問わず必要ではないか。物事を客観的に捉えることができるようになる青年期において自らの「生と死」、そして自分を取り巻く他者の「生と死」にいかに向き合うかは、その後の人生の経過においても重要な過程であると考ええる。そのために「死生観」に関する研究は、最近著しい進展がみられる(片桐、2014)。このような死生観に関する研究において女性の死生観のみに注目した研究がみられる。このような研究は女性と男性の社会的位置づけの歴史的経過に見られる差異が死生観に反映しているかもしれないという前提で行われている可能性がある。したがって死生観の性差について無視することができないと考える。死生観の性差について、丹下(1995)、松田(2000)、田中・後藤・岩本・李・杉・金山・奥田・国次・芳原(2001)、岡・道廣・安東・安福(2002)、安藤・松井・福岡(2004)、長崎・松岡・山下(2006)、松下(2009)、植田(2010)、日瀧(2011)などの研究が挙げられる。丹下(1995)は、心的発達及び死に関する深い思索は肯定的な死生観と関連し、そして死の回避に向かわない限りにおいては肯定的死生観と関連するであろうと考えて死生観の性差を検討した。その結果、男性は思索頻度が生を全うさせる意志に影響しないが、女性

では思索頻度が高いと生への意欲が低下していること、女性は男性よりも死後の存在を信じていること、女性は男性より間接的であれ死との接触を回避したがること、また、女性は男性よりも死を現実的にとらえていること、女性は男性に比べ肉体のみの生よりは精神の死を重視していることを明らかにした。また、女性は男性よりも死への恐怖や死からの回避の意識が高いことに関しては、死後の世界を信じることや運命として受け入れることによって、死に対する恐怖心を低減しようとする意識が働いていることも考えられるとした。田中ら(2001)は、男性は女性に比べ死に対してあまり関心を示さないとされ、死後の世界や寿命観を抱きにくいと述べた。安藤ら(2004)によれば、女性は男性よりも死への恐怖や死からの回避の意識が高いことを示した。松下(2009)は、女性は男性に比べて、「死はこの世の痛みと苦しみからの解放である(解放としての死)」、「死んでも魂は残る(死後の世界観)」、「寿命は最初から決まっている(寿命観)」と考える人が多かったと述べた。日湯(2011)は、中年期に焦点を当て死に対する意識について研究した結果、「死後の世界観」、「解放としての死」、「寿命観」については女性が男性よりも有意に高い得点を示したことから、女性は男性より、死後の世界を信じ、死を開放としてとらえる意識や、死ぬことを運命として受容する意識が高いと述べた。

2006年の介護保険の見直しで看取り介護加算が創設され、2009年には看取り介護加算の基準改正が改正され、ターミナルケア加算も新設された。このような制度の改正により福祉の現場では人の最期と向き合う機会が急速に増加しているが、中野(2010)や福田・徳山・千草(2013)によれば、福祉の現場や福祉従事者養成校および福祉系学生を対象にした「生と死」に関する研究は少ないのが現状であると述べている。片桐(2014)は福祉の現場で必要とする人材育成を主目的とする福祉系大学生の死生観を明らかにすることに加え、性別による特徴をも検討した。特に性別についての結果によれば、女子学生が男子学生より死を解放として捉え、寿命や運命を信じる傾向があることから死という存在を受容する態度を示していると解釈した。しかし、このような死生観は近親者などとの死別体験が影響するのではないかと考えた。河合・下仲・中里(1996)、澤井(2000)、Davis & Nolen-Hoeksema(2001)、山崎(2002)、赤澤・辻本(2003)、内布(2003)、橘(2004)、富松・稲谷(2012)によれば、死別体験が死生観に影響することを示唆している。このような結果から死生観に関する検討においては死別体験の有無との関連を重視する必要があるといえる。Katagiri(2015)も死別体験と死生観との関連をみた。その結果によると、特に死別体験を有する女子学生は、死を忌むべきものでなく、死をプラスに捉え、死を再認識し、自分や自分を取り巻く周りを再構築することにより死に新たな意味づけを行っていることがわかった。こ

のような死生観の構築は、直接的には死別体験が影響すると考えられるが、長期的には家庭、学校や地域といった社会における様々な体験を通して確立されていくものであると考えた。

そこで大学生に至るまでの学校教育期間における「生と死」の教育に焦点を当てることにした。富松・稲谷(2012)は死生観の世代間研究で発達の観点から見た死生観について詳しく述べており、丹下(1999、2004)は、青年期において死を主題として扱うことはその後の人生の基盤を形成することにもなると述べている。森本・宮松(2005)は自我同一性の確立は死生観に影響を与えていると示唆しているように、青年期、とくに後期青年期である大学生の死生観の検討の重要性が伺える。このことは発達段階に応じた生や死に関する合理的な教育的配慮を促していると考えられるべきであろう。森川・平井・柏木・坂口・安部(1999)によれば、「生と死」に関する教育は、その対象それぞれの発達段階を考慮したアプローチやカリキュラムの必要性をすでに述べている。大学の死生学教育の検討のためにも大学入学以前に焦点を当てるために入学以前の学校教育における死別体験のモデルとして動物飼育に焦点を当てて検討を試みようとした。しかし、この検討を行うためには大学入学以前の学校教育で行われている「生と死」に関する教育の実情を明らかにする必要がある。

以上から、本研究では、大学入学以前の学校教育における死生学の扱いを取り上げ、その実情を明らかにすることを目的とした。

II. 方 法

1. 調査協力者

調査協力者は、中部学院大学および短期大学部学生で調査の協力を承諾した男性41名、女性64名の計105名であった。

2. 調査内容

調査内容は協力者の基本属性、以下で述べる質問内容と動物飼育の経験についての調査で構成した。基本属性については、性別、年齢、学年、所属学部等に回答を求めた。質問内容では、死について考えた年齢、死別体験の対象、小学校での生と死の学びの授業経験の有無とその科目について質問した。動物飼育については、動物飼育体験の有無について尋ね、動物飼育時に動物の誕生や死を体験した場合には、その時の気持ちについて書いてもらうために自由記述欄を設けた。

3. 調査期日と調査手順

2015年4月14日及び4月17日に開講された講義時間内に実施した。調査開始の前に調査協力者である学生に調査の趣旨の説明を行った。説明の内容としては、調査調

査は個人が確定されないように無記名であること、学習成績と無関係であること、調査協力は強制でなく協力者の自由意志で判断すること、得られた結果は研究のみに使用し、他の目的に流用しないことを伝え、調査用紙が提出されたことで調査に協力がえられたと判断するとした。その後、調査用紙を直接配布し、記入終了後直ちに回収した。

4. 倫理的配慮

本研究を進めるにあたり大学の倫理審査会の承認を得た。個人情報保護に関しては大学の倫理基準・倫理規定に則り研究を行った。

Ⅲ. 結果と考察

調査に対する回答者数は105名で、有効回答率は100%であった。回答者の平均年齢は19.5歳であった。回答者は大学1年生が85名(81.0%)、3年生が19名(18.1%)、学年不明が1名(0.9%)であった。

1. 大学入学以前の学校教育における「生と死」の授業について

学生の大学入学以前の学校教育における「生と死」に関する授業経験の有無について調べた。表1には小学校、中学校および高等学校における「生と死」に関する授業経験の有無の人数をそれぞれ示した。表によれば、小学校、中学校および高等学校で「生と死」に関する授業経験を有している学生は、それぞれ41%、44.8%、38.1%であった。また経験のなかった学生は、それぞれ59%、54.3%、56.2%であった。このように小学校、中学校および高等学校のすべてにおいて、「生と死」に関する授業経験を有さない学生は半数以上を占めていることが明らかになった。本調査において「死」を考えた時期を調べた結果、13.3歳であることがわかった。すなわち、中学1年生が自分や他者の死について考え始めるとすると、その年齢に達する以前の小学生段階での学習において「死」に関する何らかの知識を間接的にでも与えることが必要であると考えられる。

表1 小学校、中学校および高等学校における「生と死」に関する授業経験の有無

| | 小学校 | 中学校 | 高等学校 |
|-----|-----------|----------|----------|
| あり | 43人(41.0) | 47(44.8) | 40(38.1) |
| なし | 62(59.0) | 57(54.3) | 59(56.2) |
| 無回答 | 0(0) | 1(0.9) | 6(5.7) |

注) 回答者数=105人、()内の数字は%

小学生を対象にした「生と死」の教育に関しては、井上・岡田・菅野・志賀・荃津・井上(2005)が、低学年の子どもでは、ペットのような身近な教材を使用して、「死や生」を考える機会を与える必要があると述べ、また、大曲(2012)は、2年生・4年生に比べ6年生の4人中3人が自分の死を考えたことがあることや、2年生の児童では「生き物の死」の体験や6年生の児童では「身近な人の死」の体験が死の意識と関連するという分析結果を挙げている。山田(2013)は、多様な命に関する授業で「自分」、「他人」、「動植物」の3つに区分して、自分の命と他人の命と関係していること、人間の命と動植物の命とも関係していることの意味を発展させていくことが重要であると論じている。荃津・小林・井上・岩本・工藤(2009)は、小学生を持つ親が子どもと「死」について話すことの認識とその実態について明らかにし、その結論として、子どもを取りまく学校現場や医療現場など社会全体で子どもと「生」や「死」の問題を共有していくことが大切であると主張している。

さらに死を考え始める年齢に該当する中学校では「生」との関連で「死」に関する対応は避けて通れないと考えられる。中学生を対象にした論文は、山梨(2001)や仲・丸山(2013)の論文がある。高校生を対象にした論文は、川村(1998)、大宮(2001)、佐藤(2001)、大宮・河合(2003、2005)の論文がある。また山崎(2001)は小中学生および保護者を対象にした意識調査により研究した。清水(1991、1992)、杉本(2001)や大仲(2010)は幼稚園生、小学生および中学生または小学生、中学生、高校生および大学生を対象にした。いずれにしる「生と死」の学びの充実が求められると共に、小学校と中学校の連携が大切であり、加えて高等学校における取り組みは急務であると述べている。

2. 小学校、中学校および高等学校の各授業科目における「生と死」に関する学び

以上のことから中学生に達する以前の小学生段階での「生と死」に関する学びの重要性が指摘されたが、その学びの現状をみる必要がある。そこで、次に「生と死」に関する授業経験ありと回答した学生が、小学校、中学校および高等学校の授業で、どのような授業科目において「生と死」を学ぶ機会があったかについて質問した。表2-1では小学校の結果、表2-2では中学校の結果、表2-3では高等学校の結果を、それぞれ示した。また表3には学校内での動物飼育に関する調査結果を示した。なお回答人数は複数回答のために表1に示された学校別の授業経験ありの人数と一致しない。

表2-1によれば、小学校の授業科目では道徳の授業で「生と死」を学んだと回答した学生は71.7%で、最も多かった。次いで総合的な学習の授業が15.1%であった。その他では国語が5.7%、保健体育が3.8%、社会が1.9%であった。道徳の授業で「生と死」の学びの機会

表2-1 小学校で「生と死」を学んだ授業科目

| 授業科目 | 人数 (%) |
|--------|-----------|
| 国語 | 3人 (5.7) |
| 算数 | 0 |
| 理科 | 0 |
| 社会 | 1 (1.9) |
| 英語 | 0 |
| 保健体育 | 2 (3.8) |
| 道徳 | 38 (71.7) |
| 総合的な学習 | 8 (15.1) |
| その他 | 1 (1.9) |
| 総回答数 | 53 |
| 回答人数 | 43 |
| 無回答人数 | 0 |

があったとする学生が多かったのは授業科目の狙いからみて当然である。総合的な学習で学ばすことは授業の特性からみて比較的容易であると考えられる。他方、「生と死」を学ぶ機会が与えられやすい保健体育が少ないのは今後の検討課題であろう。同様なことは理科についてもいえるだろう。「生と死」の学びを道徳に位置づけることとその指導法に関する検討は喫緊の課題である。「生と死」を考える機会として道徳の果たす役割は大きい。今回、道徳の次に多かった総合的な学習は、調査協力者の小学校時代に盛んに取り組まれていたことも関連していると思われるが、「生と死」の学びに関しては、各科目が単独で機会を設け、学びの深まりをもたせることには学びの効果として限界があるように思われる。河内(2013)も学校現場の中で「生」だけでなく、「死」をも扱う教育活動が意外に少なく、国語や社会、理科などの中では、「生」や「死」について学ぶことはあっても、それはあくまで国語的、社会的や理科的な視点での「生」や「死」の捉えであり、そこには命を根本的に、自らの生き方につなげるという活動が存在することはないと指摘しており、学校教育において「生」だけでなく「死」

表2-2 中学校で「生と死」を学んだ授業科目

| 授業科目 | 人数 (%) |
|--------|-----------|
| 国語 | 1人 (1.8) |
| 数学 | 0 |
| 科学 | 2 (3.6) |
| 社会 | 1 (1.8) |
| 英語 | 0 |
| 保健体育 | 7 (12.7) |
| 道徳 | 20 (36.4) |
| 総合的な学習 | 23 (41.8) |
| その他 | 1 (1.8) |
| 総回答数 | 55 |
| 回答人数 | 44 |
| 無回答人数 | 3 |

についても子どもたちに理解させていくことが必要であると述べており、今後の学校において組織的に「生と死」に関する教育をいかに進めるべきかの実践的課題でもあると述べている。

表2-2によれば、授業科目の総合的な学習で「生と死」の学ぶ機会が41.8%で最も多かった。次いで道徳が36.4%であった。保健体育が12.7%、科学が3.6%、国語と社会が1.8%であった。中学校では、小学校と異なって、総合的な学習が道徳より多くの学ぶ機会が与えられていた。保健体育も小学校に比べ学ばす機会が多くなっていた。

表2-3によれば、高等学校では中学校と同様に総合的な学習が35.4%で最も多くの学ぶ機会が与えられ、次いで保健体育が22.9%であった。これは中学校と異なって道徳より多かった。その他の科目が18.8%であった。

表2-3 高等学校で「生と死」を学んだ授業科目

| 授業科目 | 人数 (%) |
|--------|-----------|
| 国語 | 1人 (2.1) |
| 数学 | 0 |
| 科学 | 1 (2.1) |
| 社会 | 2 (4.2) |
| 英語 | 0 |
| 保健体育 | 11 (22.9) |
| 道徳 | 7 (14.6) |
| 総合的な学習 | 17 (35.4) |
| その他 | 9 (18.8) |
| 総回答数 | 48 |
| 回答人数 | 39 |
| 無回答人数 | 1 |

以上、小学校、中学校および高等学校のそれぞれ結果によると、小学校では道徳において最も多くの学びの機会が与えられ、次いで総合的な学習であった。中学校では道徳をしのいで総合的な学習となり、次いで道徳、保健体育と続いた。高等学校では総合的な学習が最も多いことは中学校と同じであったが、次いで保健体育、道徳と続いた。このように道徳が「生と死」に関する学びの中心的科目であるといえる。この道徳の教育に関する研究は全国的に非常に熱心に取り組まれている。しかし道徳が学校教育としての位置づけが大きく変化してきた今日、その教授内容や指導の在り方に関する検討は喫緊の課題である。「生と死」を考える機会として道徳の果たす役割は大きい。道徳が単独でその役割を果たすには限界がある。上記の小学校、中学校、高等学校でみられたように大学以前の学校教育では道徳、総合的な学習、保健体育の3つの授業科目が中核的役割を果たしていることは間違いない。そのためにそれぞれの授業科目がそれぞれ単独で行うのは効果的でない。「生と死」に関する教育を効果的に行うためには各授業科目間の連携が強く求められる。

3. 小学校、中学校及び高等学校における動物飼育について

表3によれば、小学校での動物飼育の体験は74.5%の学生が有りと答えた。中学校では7.8%になり、高等学校では4.2%と体験無しが圧倒的に多くなった。したがって動物飼育体験を通して「生と死」の学習の可能性は小学校に限定されているように考えられる。

表3 小学校、中学校及び高等学校における動物飼育体験の有無の人数

| | 小学校 | 中学校 | 高等学校 |
|-------|------------|-----------|-----------|
| 有 | 76人 (74.5) | 8 (7.8) | 4 (4.2) |
| 無 | 26 (25.5) | 95 (92.2) | 92 (95.8) |
| 回答人数 | 102 | 103 | 96 |
| 無回答人数 | 3 | 2 | 9 |

注) () 内の数字は%

今回の調査によると、飼育体験を通じ飼育していた動物が死んだ場合に、「クラス皆で悼み、弔う時を共有した」という記述が1件であり、その他は「先生が知らない間に処理していた」、「亡くなった後のことはわからない」などの記載にとどまっていた。生き物を育てることを学ぶ良い機会であるが、その機会を与えることのできる学校は年々減少している。そして、動物飼育の機会を与えている学校においても、生き物を育てる大切さ、命の大切さのみに焦点を当てすぎ、「死」に関しては殆ど触れられていないのが実情であろう。動物飼育について焦点を当て検討している中川(2007)、土田・増田(2008)、今野・尾形(2009)や鍋島・光村・高野(2013)の論文にもみられるように、動物飼育から学ぶ「生と死」の在り方に関してさらなる検討が必要であると考えている。

IV. まとめと今後の課題

死生観の構築は、家庭や学校や地域といった社会における様々な経験や体験を通じて確立されていくものである。本報告では、「生と死」に関して、大学生に至るまでの学校教育の経過でどのような授業科目において学ばせてきたのかの実情の一部を明らかにしようとした。その結果、小学校、中学校および高等学校のいずれにおいても50%以上の学生が授業経験なしと回答した。学校指導要領において「生徒らの生きる力」の育成に関しての記載があるにもかかわらず、このように半数以上の学生が授業経験なしと回答していたことは極めて憂慮すべきである。本報告において明らかになった「死」を考え始めた時期が13歳であることは、中学校1年生の時期から自らの「死」および他者の「死」について考え始めたことを意味する。したがって小学校の高学年から「生と死」に関する学びを始める必要があるよう思われる。こ

のことは、「生と死」に関する学びは、小学校、中学校および高等学校の連携が前提であることは当然のことである。また本報告で明らかにした道徳、総合的な学習や保健体育の各授業科目が「生と死」に関する学びにおいて大きな役割を果たしているが、それぞれの科目が単独で学びの機会を設けるだけでなく、各授業科目相互の連携に注意を払いながら取り組むことも大切である。

しかも、このような授業科目間や小学校、中学校および高等学校間の学びの連携に関する課題以前に多くの検討すべき課題が残されている。例えば、「生と死」に関する学びに対して実践の場の教師が「生と死」に関する認識について実態調査をする必要がある。多くの小学校で動物飼育を教育に取り入れていることは本報告で明らかになったが、その教育的意義の捉え方や死生学的配慮がどのように行われているかなどについての調査も必要であろう。いずれにしろ今後の検討課題は山積している。

引用文献

- 赤澤正人・辻本寛和(2003) デス・エデュケーションが及ぼす効果に関する研究～試作プログラムによる介入実験を通して～. 臨床死生学年報, 大阪大学大学院人間科学研究科人間行動学講座臨床死生学研究分野, 8, 2-14.
- 安藤清志・松井豊・福岡欣治(2004) 近親者との死別による心理的反応 ― 予備的検討 ―. 東洋大学社会学部紀要, 41, 63-83.
- Davis,C.G., Nolen-Hoeksema,S.(2001) Loss and meaning: how do people make sense of loss? American Behavioral Scientist, 44, 726-746.
- 福田陽子・徳山貴英・千草篤磨(2013) 特別養護老人ホームにおける「看取り介護」の現状と課題. 高田短期大学紀要, 31, 49-60.
- 日湯淳子(2011) 中年期の時間的展望と死に対する意識の関連 ― 時間的態度による年代別の検討. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科紀要, 4(2), 123-128.
- 今野洋子・尾形良子(2009) 北海道四都市における動物介在教育(AAE)の現状と課題 ― 小学校を対象とした質問紙調査から ―. 北翔大学北方圏学術情報センター年報, 2, 13-22.
- 井上ひとみ・岡田祥子・菅野予史季・志賀加奈子・荃津智子・井上由紀子(2005) 小学生を対象としたDeath Educationの実践と評価 ― 小学2年生の記述内容の前後比較より ―. 石川看護雑誌, 3(1), 65-75.
- 石田順子・石田和子・神田清子(2007) 看護学生の死生観に関する研究. 桐生短期大学紀要, 18, 109-115.
- 糸島陽子(2005) 死生観形成に関する調査 ― 看護学生と大学生の比較 ―. 京都市立看護短期大学紀要, 30, 141-147.

- 片桐史恵 (2014) 福祉系大学生の死生観及びその性差に関する調査—死生観尺度による検討—. 中部学院大学・短期大学部研究紀要, 15, 97-104.
- Katagiri, F (2015) A study on life and death attitudes related to the death and bereavement experiences of university students in Japan—An examination using the death attitudes inventory—. The Journal of Chubu Gakuin University and Chubu Gakuin College, 16, 13-20.
- 河合千恵子・下仲順子・中里克治 (1996) 老年期における死に対する態度. 老年社会科学, 17(2), 107-116.
- 川村康文 (1998) 高校生の生命倫理観の調査. 京都教育大学環境教育研究年報, 6, 1-8.
- 河内菜摘 (2013) 「生と死の教育」に関する開発実践～小学校における道徳とミニ道徳を中心に～. 岐阜大学養育学部教師教育研究, 9, 163-173.
- 荃津智子・小林千代・井上由紀子・岩本喜久子・工藤悦子 (2009) 小学生を持つ親が子どもと「死について話すこと」の意識と実態. 天使大学紀要, 9, 81-92.
- 松田信樹 (2000) 死の不安の年齢差に関する研究. 大阪大学教育学年報, 5, 71-83.
- 松下千夏 (2009) 青年期の死の不安と死生観—高齢者との比較から—. 龍谷大学大学院文学研究科紀要, 31, 103-123.
- 森川優子・平井啓・柏木哲夫・坂口幸弘・安部幸志 (1999) 死生観に関する研究(Ⅲ)—発達による死生観の変化. 死の臨床, 22(2), 246.
- 森本明子・宮松直美 (2005) 大学4年次における看護学生と一般女子学生の死生観に関する研究—死生観尺度・多次元自我同一性尺度による分析—. 日本看護学会論文集2 成人看護, 36, 297-299.
- 村上信・佐藤真由美・宮下榮子・濱野強・藤澤由和 (2012) 社会福祉士養成教育における学生の死生観に関する意識調査. 淑徳大学研究紀要, 46, 87-94.
- 鍋島恵美・光村智香子・高野史朗 (2013) ウサギのハイとの別れ(死)が子どもに残したもの—幼児期に継続飼育を体験した小学生の語りを通して—. 京都教育大学環境教育研究年報, 21, 57-73.
- 仲律子・丸山真名美 (2013) 「いのちの授業」が中学生の死生観に与える影響. 東京女子大学心理学紀要, 創刊号, 75.
- 中川美穂子 (2007) 小学校における動物飼育活用の教育的効果とあり方と支援システムについて. お茶の水女子大学子ども発達教育研究センター紀要, 4, 53-65.
- 長崎雅子・松岡文子・山下一也 (2006) 年代および性別による死生観の違い—非医療従事者を対象としたアンケート調査を通して—. 鳥根県立看護短期大学紀要, 12, 9-17.
- 中野一茂 (2010) 介護におけるグリーンケア. 共栄学園短期大学研究紀要, 26, 163-169.
- 大曲美佐子 (2012) 小学生の死の意識と喪失体験及び自尊感情との関係性について. 教育諸学研究, 26, 3-16.
- 大宮美智枝 (2001) 高等学校における「生教育」の実践～生徒と共に考える命の授業～. 東海大学健康学部紀要, 6, 41-50.
- 大宮美智枝・河合優 (2003) 高等学校における「いのちの教育」の実践的研究・第一報. 横浜国立大学教育人間科学部紀要, 教育科学, 5, 117-136.
- 大宮美智枝・河合優 (2005) 高等学校における「いのちの教育」の実践的研究・第二報. 横浜国立大学教育人間科学部紀要I, 教育科学, 7, 1-14.
- 大仲政憲 (2010) 生命尊重に関する指導のあり方についての提言—児童・生徒から教員養成大学学生の実態に基づいて—. 大阪教育大学紀要, 第V部門, 59(1), 15-28.
- 岡須美恵・道廣睦子・安東勝弘・安福真弓 (2002) 死生観に関する教育の必要性についての一考察～女子大学生のアンケート調査から～. インターナショナル nursing care research, 1(2), 85-89.
- 佐藤喜世恵 (2001) 子どもの心が動く健康教育をめざして—「死」を考える—. 名古屋大学教育学部附属中・高等学校紀要, 46, 137-143.
- 澤井敦 (2000) 現代日本の死生観と社会構造(上). 大妻女子大学人間関係学部紀要, 創刊号, 13-29.
- 清水美智子 (1991) 子どもは生と死をどのように認識していくか(1)—発達人間学の課題としての死生観の探求—. 大阪教育大学紀要, 第VI部門, 40(1), 88-99.
- 清水美智子 (1992) 子どもは生と死をどのように認識していくか(2)—発達人間学の課題としての死生観の探求—. 大阪教育大学紀要, 第VI部門, 40(2), 255-272.
- 園田麻利子・上原充世 (2007) ターミナルケアの授業における学生の死生観に関する検討. 鹿児島純心女子大学看護栄養学部紀要, 11, 21-35.
- 杉本陽子 (2001) 子どもの「生と死」に対する認識. 日本健康医学会雑誌, 10(1), 2-11.
- 橘直美 (2004) 医療を支える死生観. 関西大学社会学部紀要, 97, 161-179.
- 田中愛子・後藤政幸・岩本晋・李恵英・杉洋子・金山正子・奥田昌之・國次一郎・芳原達也 (2001) 青年期及び壮年期の「死に関する意識」の比較研究. 山口医学, 50, 697-704.
- 丹下智香子 (1995) 死生観の展開. 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 42, 149-156.
- 丹下智香子 (1999) 青年期における死に対する態度尺度の構成および妥当性・信頼性の検討. 心理学研究, 70(4), 327-332.

- 丹下智香子（2004）青年前期・中期における死に対する態度の変化. 発達心理学研究, 15(1), 65-76.
- 富松梨花子・稲谷ふみ枝（2012）死生観の世代間研究. 久留米大学心理学研究 久留米大学文学部心理学科・大学院心理学研究科紀要, 11, 45-5.
- 土田あさみ・増田宏司（2008）動物を飼育するというこゝと— 家庭動物飼育に関する意識調査 —. 東京農業大学農学集報, 53(3), 253-258.
- 内布敦子（2003）医療施設における end-of-life ケアの実勢状況と医療従事者の死に対する態度. ターミナルケア, 13(2), 154-162.
- 植田喜久子（2010）壮年期女子の死生観尺度の作成. 高知女子大学看護学会誌, 35(1), 1-8.
- 山田真紀（2013）自分の命について考える道德の授業— 生とふたつのアプローチから —. 椋山女学園大学教育学部紀要, 6, 325-334.
- 山梨八重子（2001）授業「脳死・臓器移植を考える」— 社会科と保健科で取り組んだ授業実践 —. お茶の水女子大学附属中学校紀要, 31集, 57-69.
- 山崎裕二（2001）三鷹市・武蔵野市の小中学生および保護者の脳死・臓器移植に関する意識調査. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 14, 107-119.
- 山崎裕二（2002）医療系短大における「死の教育学」の実践（1）— 「死に関する介護・医療系学生の意識調査」の授業導入 —. 日本赤十字武蔵野短期大学紀要, 15, 89-96.

Considerations of “Life and Death” in School Education prior to Entering University — Through the Learning Experiences of Students

Fumie KATAGIRI

Abstract : This study examines how thanatology is handled in school education prior to students entering university, with the purpose of clarifying the present situation.

- The study subjects consisted of 105 university and junior college students. More than 50% said they had no experience of learning about “life and death” in elementary school, junior high school, or high school. The students began thinking about death around the age of 13; in other words, during their first year of junior high school. Thus, it is necessary for students to start learning about the concepts of “life and death” in the final years of elementary school at the latest. At the very least, this matter should be included in the curriculum in elementary and junior high schools. If possible, it should also be incorporated into high schools.

- Next, the study examined the experiences of students who said they did learn about life and death in school. It was found that the main course topics for learning about “life and death” were moral education and integrated studies in both elementary and junior high school, and integrated studies and health and physical education in high school. However, there is a limit to providing opportunities to learn about death in each specific course. To overcome this problem, it is necessary to pay attention to the mutual relationship among these courses.

Keywords : Life and death, School education before entering university, School course topics